前田家本色葉字類抄音注攷（Ⅱ）

――反切音注の考察（上）――

二戸麻砂彦

一　序言
二　反切に対する整理と分析の方法
三　広韻と一致しない例
四　広韻と一致する例
五　色葉字類抄の増補改編と反切
六　結言

一　序言

本邦辞書史上における前田家本色葉字類抄[注1]（以下「前田本」と略称する）の存在価値は、衆目の認める所であり、多言を労するまでもない。その跋文には、「自天養比至于治承卅余年補綴无隙部類如舊更加星點」（下巻一二二ウ）と記されており、治承年間（一一七七―八〇）に三巻本として補綴成立したことが知られる。漢字を和訓に基いてイロハ四十七篇に分け、さらに各篇を二十一の部類に分けた和漢辞書とも称せられるべきものである。前田本には、和訓の他に、仮名書音注・反切音注・同音字注といった三形式の音注が存在する。この中、同音字注については、すでに稿論を述べた経緯がある[注2]。本稿及び続稿[注3]においては、反切音注（以下「反切」と称する）に着目し、その性格を明らかにするものである。

二　反切に対する整理と分析の方法

前田本に存在する反切の総数は一〇三五例にのぼる。その中の一〇三二例は下巻に見出され、上巻には三例を認めるのみである。この状況を説明するためには、色葉字類抄の増補改編の過程、特に二巻本と三巻の関係について触れなければならない。この点に関しては、後章で述べることとし、まず前田本の反切に対する整理と分析の方法を明らかにしておきたい。本来、反切は中国語音を知るための手段であり、ある音韻体系の中で組織的に示される。たとえば、中国語音韻史上における中古音[注4]（Ancient Chinese）は、切韻系韻書[注5]の反切から帰納される音韻体系であり、六朝末から隋初にかけての北方標準音と考えられる。よって、前田本の反切においても何らかの音韻体系が反映しているのではないかという推測が浮び上がるわけで、この中古音は本邦における当時の字音享受の時代的背景に対応するのである。実際、切韻系韻書は新撰字鏡や図書寮本類聚名義抄[注6]（以下「図書寮本」と略称する）における重要な出典のひとつである。そこで前田本の反切がどのような性格を有しているかを、まず中古音によって整理分析する。なお、中古音の表記は三根谷説[注7]に従う。

さて、中古音を援用する場合、具体的には切韻系韻書の中でも完本である広韻を用い、前田本の反切が広韻の反切とどの程度一致するかを確認し

ていくのである。その結果、九割以上にあたる九五二例の一致を見る。紙数の制約上、その一覧表は続稿[注3]に掲載するが、一部を次に示そう。

	〔被注字〕	〔前田本の反切と所在〕	〔広韻の反切〕	〔中古音〕
(イ)	緩	胡管反（下ユ68ウ1辞字）	胡管切	ɣuan²
(ロ)	柳	力久反（下シ69ウ3植物）	力久切	liɐu²
(ハ)	熱	如列反（下ア24ウ6天象）	如列切	ñiat
(ニ)	識	賞職反（下シ75ウ7辞字）	賞職切	śiɐk
(ホ)	弟	特計反（下テ19オ3地儀）	特計切	dei³

このような高一致率から、前田本の反切は広韻の反切をそのまま採用したのではないかと考えたくなる。しかし、それは甚だ危険を含んでいる速断である。というのは、韻書を座右に置きながらその反切を採用したとすれば、九割強どころか全用例について一致することが期待されてよいのである。不注意による誤字の場合を除外すると、不一致は起り得ないと考えられる。それにも関わらず、一割弱（八三例）の不一致が実際に見出されるのは、反切を施す上で何らかの事情が存在したためであろう。これを明らかにすることが、前田本の反切を考察する上で重要となってくる。

三　広韻と一致しない例

前田本の反切が広韻の反切と一致しない八十三例を〔表1〕（　頁）に掲げる。以下、〔表1〕に沿って個別的な分析を試みよう。まず、前田本の反切を施すに際して、広韻が重要な役割を担ったと述べたが、広韻そのものを見たかどうかは疑問である。広韻の刊行は宋代まで時代が降るし某某切という形で表わされ、前田本の某某反とは異なっている。むしろ、広韻以前の edition と考える方が自然である。例を一つ示そう。〔表1〕の5「榎」は、前田本「古雅反」に対して、該当の広韻「古疋切」であり、一致しない。しかし、切韻残簡[注8]の「切二」・「切三」・「王一」及び完本切韻である「王三」[注9]には「古雅反」とあり、前田本に一致するのである。広韻に一致しなくとも、他の切韻系韻書で一致するということは、広韻を座右に置いていたのではないと考えるべきであろう。では、どの edition が関わっていたのであろうか。その特定をするには例が極めて少ない。〔表1〕の1～9（九例）がこれに該当するが、これらだけを見ても種々の切韻諸本と一致している。しかも、現在では切韻系韻書の edition すべてを被見することができないという点も忘れてはならないのである。おそらく、本邦にも多種の韻書が伝えられたと推測されるが、そのほとんどは佚書となり現存しない。図書寮本の出典の一つである「東宮切韻」も、名のみ知られるだけで失われてしまった。よって、前田本の反切を施す際に、どのような韻書が用いられたかは具体的に明らかではない。あるいは、孫引きの可能性さえ否定しきれないのである。しかし、広韻と一致する九五二例及び切韻残簡などと一致する九例（両者併せた一致率は約93％）が存在することは事実であり、切韻系韻書またはそれを出典に有する文献が前田本の反切を付すにあたって有力な典拠となったであろうと認められる。

では、残った七十四例（全用例中の約7％）をどう考えればよいのであろうか。ここで、我々は切韻系韻書以外の文献にも目を向ける必要性が生じるのである。10～53の四十三例はまさにその例である。辞書を編纂する時の常套手段として、先行文献の引用ということが行なわれる。前田本の場合にも、このことがあてはまるのである。諸種の文献が考えられようが特に倭名類聚抄と類聚名義抄の両者は辞書的体裁を保つ点からも重要な典拠となったにちがいない。その中、類聚名義抄には引用書を明示した図書寮本が現存しており、とりわけ貴重である。ただし、法上の一部が残っているのみで、全貌を窺うことができないのはいかにも残念であるが、図書寮本所収の反切と前田本の反切とが一致する六例を次に示そう。

	〔被注字〕	〔図書寮本の反切〕	〔万象名義の反切〕
13	詭	弘云倶毀反	倶毀反
29	悛	弘云旦泉反	旦泉反
44	譚	弘云徒耽反	徒耽反

21　注　　慈恩云丁住反
31　討　　茲云恥老反
28　紲　　广云思列反

右の六例では、各々の反切に引用書名が示されている。「弘」は、空海（弘法大師）撰の篆隷万象名義[注10]（以下「万象名義」と略称する）及び金剛経一字頂輪王儀軌音義[注11]を指していると認められる[注12]。ただし、13・29・44の三例は万象名義からの引用である。次に「慈恩」及び「茲」であるが、これらは窺基（慈恩大師）が関わっている引用書であろう。今そのすべてはわからないが、理趣経疏三巻・無垢称経疏六巻・大乗法苑義林章七巻・妙法華経玄賛十巻・瑜伽師地論略纂十六巻などの書名をあげられよう。しかし、現存しないため、そのいずれであるかは不明である。「广」は、広韻・広雅ないし玄応音義[注13]を指していると考えられる。そのいずれであるかは個別的に確認する必要があるが、私見によると、図書寮本の「广」の多くは玄応音義による引用である。28の例も玄応音義を指していると認められる。なぜならば、被注字に対する広韻の反切は「私列切」であり、反切上字が一致しない。それに対して、玄応音義では該当の被注字それ自身はないのであるが、同音の「媟」が見出され、その反切は「思列反」である。よって、28の「广」は玄応音義を引用した蓋然性が高いと認められる。これら六例のように、図書寮本に掲出され、引用書を特定することができる例は幸いであるが、その数は少ない。そこで、現在する引用書である万象名義と玄応音義それら自身にあたってみることにしよう。まず、万象名義の反切と前田本の反切とを比較すると、実に三十六例の一致を見るのである。10～20・22～32・34～46・49の諸例が該当する。次に玄応音義と比較した場合、11・12・20・24・25・32・37・40・41・43・48・50～52の十四例が一致する。しかも、48・50～52の四例を除く十例については、万象名義とも一致している点を見逃すわけにはいくまい。すなわち、前田本の反切を付すに際して、万象名義あるいは玄応音義などを単独で引用したのではなく、図書寮本に引用された反切を採用したのであろうと推測されるのである。図書寮本は、当時本邦に存在した主要な辞書・音義などを集大成した文献であるから、便利有用なる先行文献として、前田本の反切を施す際大いに活用されたであろう。先に掲げた13・21・28・29・31・44の六例は、まさにこれを物語っている。さらに、30・33・36・37・42・43・45・47の八例は観智院本類聚名義抄[注14]（以下「観智院本」と略称する）所収の反切と一致し、この想定を補強している。

以上の考察より、前田本の反切が施されるあたっては、切韻系韻書のいずれかの edition 及び図書寮本の両者が典拠となった可能性を指摘できるのである。しかし、なぜ二つの文献を引用する結果となったのであろうか。その高一率（93％）から観て、切韻系韻書の反切を引用すれば済んだはずであるのに、敢えて図書寮本をも引用した理由は何であろうか。考えられることは、まず切韻系韻書によって反切が付され、それを追加する形で図書寮本を引用したのであろうという仮説である。次に掲げる例は、これを裏付けすると認められる。

	〔被注字〕	〔前田本の反切と所在〕	〔広韻の反切〕	〔中古音〕
(ヘ)	維	以追反（下ス116ウ6方角）	以追切	jiuei^{1}
(ト)	惟	以追反（下コ8ウ2辞字）	以追切	jiuei^{1}
(チ)	希	香衣反（下コ9ウ6辞字）	香衣切	xiʌi^{1}
(リ)	詮	此縁反（下ア38ウ2辞字）	此縁切	tsiuan^{1}
(ヌ)	曜	弋照反（下エ14オ1天象）	弋照切	jiau^{3}
(ル)	誂	徒了反（下ア37ウ2辞字）	徒了切	deu^{2}
(ヲ)	鮎	奴兼反（下ア27ウ1動物）	奴兼切	nem^{1}

これらは、前田本の反切が広韻の反切に一致する九五二例の一部であるが、各々の被注字について、(ヘ)・(ト)と15、(チ)と16、(リ)と29、(ヌ)と33、(ル)と34、(ヲ)と48は同音である。よって、切韻系韻書により反切を施したならば(ヘ)～(ヲ)と同様に、15・16・29・33・34・48に対しても同様の処理が期待されるはずである。しかし、実際には図書寮本の反切が付されたと考えられ、同音の被注字に二種類の異った反切を施した結果を生じている。切韻系韻書だけを引用していたならば、このような状況は考えられないのである。

やはり、前田本の反切は切韻系韻書によって施された後、図書寮本の反切による補いがなされたと見るべきであろう。

ところで、以上の考察によっても反切の出自が不明な53～83の三十例を残している。これらについても説明を加えておこう。

53の被注字に対する前田本の反切は「渠用反（giauŋ¹）」であり、広韻の「渠容切（giauŋ³）」とは反切下字を異にする。観智院本は広韻と同じ反切を付している。54も前田本と広韻とは反切下字を異にしている。しかも、前田本の「蜀用反（źiauŋ³）」は広韻において該当する字が存在しないのである。観智院本でも、切韻系韻書（王一・王三・切二）と同じ「蜀容反（źiauŋ¹）」が見出される。よって、53・54における前田本の反切は切韻系韻書にも観智院本にも一致せず、施注者独自のものであるかもしれない。あるいは、図書寮本に引用された反切を採った可能性もあるが、その声調の不一致（平声と去声）から見ても、このような不正確な反切を引用することは考えにくいから、その蓋然性は低いといえる。

55の場合、切韻系韻書（王一・王二・王三・切三・唐）及び新撰字鏡[注14]所収の反切は、広韻と同じ「直録反（切）」、図書寮本は「従玉反」とあり前田本の「馳六反（ḍiʌuk と）」は全く一致しない。玄応音義の「馳録反」・「馳足反」、あるいは万象名義の「馳録反」と関連があろうか。

56は、前田本「市吏反（źiei³）」に対して、広韻「鉏吏切（dʑiai³）」であり、反切上字を異にする。観智院本も「鋤吏反」とあり一致しない。

57は、前田本「几基反（kiei¹）」に対して、広韻「許基切（xiei¹）」であり、やはり反切上字を異にする。切韻系韻書（王一・王三・切二・切三）は広韻に同じである。

58は、前田本「治據反（ḍiʌ³）」に対して、広韻「遲倨切（ḍiʌ³）」であり、同音ながらも反切は全く一致しない。万象名義「仕據反（dʑiʌ³）」は反切上字を異にする。

59については、前田本の該当部分を次に掲げる。

鋤　土魚床據二反或作鉏田器也（下ス116ウ1雑物）

被注字「鋤」に対して、広韻では「士魚切（ḍiʌ¹）」の一音だけでるが「鉏」には「士魚切」の他に「牀呂切（dʑiʌ²）」を見出する。それでも前田本の「床據反（dʑiʌi³）」とは一致しない。

60は、前田本「五許反」（ɣiʌ³）に対して、広韻「五故切（ɣuʌ³）」であり、切韻系韻書（王二・王三・唐）・玄応音義及び万象名義も同じ「五故反」である。反切下字の表わす韻母の違いから考えると、「許」は「故」の誤字ではないだろうか。

61・62は、前田本「甫貝反（pai³）」に対して、広韻「蒲昧切（bʌi³）」であり、他の切韻系韻書にも一致しない。図書寮本も「補潰反（bʌi³）」であり、一致しない。

63は、〔表1〕に示したごとく、前田本の反切上字が不詳である。王一・観智院本には「子回反（tsuʌi¹）」とあるが、前田本の反切上字はどう見ても「子」とは認めがたい。

64は、前田本「私一反（siet）」、広韻「辛聿切（siuet）」であり、韻母について開口と合口の違いを示している。玄応音義・万象名義・図書寮本はいずれも「私律反（siet）」であるから、反切下字が合わない。

65は、前田本に「得晏」と割注されており、「反」の字がないため、確実に反切かどうかわからない。しかし、広韻の「得按切（tan³）」、切韻系韻書（王一・王三）の「得案反（tan³）」から考えて、前田本は「得晏反」であろう。ただし、反切下字はいずれにも一致しない。

66は、〔表1〕に示したごとく、反切下字が不詳である。広韻は「莫賢切（men¹）」、王三も「莫賢反」であり、反切下字を誤ったものであろうか。少くとも、万象名義「莫緣反（miuan¹）」は韻母を異にする反切下字を示しており、引用したとは考えにくい。

67は、前田本「魚見反（ɣen³）」に対して、広韻「魚変切（ɣian³）」である。切韻系韻書（王二・王三・唐）も「魚変反」を示し、前田本とは反切下字を異にする。玄応音義・図書寮本ともに「宜箭反（ɣian³）」である。

68は、前田本「莫到反」（mau³）」、広韻「莫報切（mau³）とある。切韻系韻書（王一・王二・王三・唐）も「莫報反」である。あるいは、前

田本の反切下字「到」は「報」の誤字か。

69は、前田本「在唐反（dzɑŋ¹）」に対して、広韻「在到切（dzɑu³）」を示す。切韻系韻書（王一・王二・王三・唐）も「在到反」である。前田本の反切下字「唐」は、仮名書音注「タウ」を念頭においたような注音であるかもしれない、ただし、この観点を導入した場合、73を除く53～77すべての例が被注字と同音の把握をしていたことになってしまい、反切を付したその意義が疑問となる恐れを含んでいる。

70は、前田本「烏老反（ʿau²）」、広韻「烏晧切（ʿau²）」である。王一・王三・切三も「烏晧反」となっている。前田本と同じ反切が、慧琳撰一切経音義に見出されるが、これを採ったかどうか不明である。むしろこの一例が結果的に偶然の一致を見たと考えるべきであろう。

71は、前田本「私妙反（siau³）」、広韻「之沙切（tʃiau³）」、王一・王二・王三「之笑反（tʃiau³）」である。玄応音義には、被注字と同音の「笑」・「肖」に対して、前田本と同じ「私妙反が」見出される。

72は、前田本「我阿反（ŋa¹）」に対して、広韻「古疋切（ka²）」、王一・王三・切三「古雅反（ka²）」、万象名義「柯夏反（ka²）」、観智院本「公雅反（ka²）」であり、いずれも一致しない。

73の前田本の反切「之国反」は、これ自体に疑義を有している。なぜなら、反切上字「之」は穿母三等（tʃ-）を表わし、反切下字「国」は鐸韻（-uak）を示すため、両者の組合せによって反切は成立しないからである。

74～77については、前田本の反切に一致する引用書が確認できないためその出自は不明である。

78・80～83は、前田本に対する該当の広韻反切が存在しない例である。他の切韻系韻書にも当然該当する反切はない。ただし、80については、観智院本に「砕間反」が見出される。これは「砕回反」の誤りかもしれない。とすれば、前田本も「砕回反」と訂正すべきであろうか。79は、前田本の反切下字が空白のため、確定できない。

以上、53～79の例に対しては引用書を確定できないが、そのほとんどは図書寮本に示されない例あるいは誤字の可能性を否定できない例である。

なお、〔表1〕の(a)～(f)については、義注と判断して、考察の対象から除外してある。

〔注〕

（1）前田本の音注を調査するに際しては、「尊経閣蔵三巻本色葉字類抄」（勉誠社、昭和五十九年五月）を底本とした。尊経閣叢刊複製本（大正十五年）よりも数段秀れた影印本と認められる。

（2）二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄音注攷（一）――同音字注の考察――」（国語研究、第四十二号、昭和五十四年三月）

（3）二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄音注攷（Ⅱ）――反切音注の考察（下）――」（山梨県立女子短期大学紀要、第二十、昭和六十二年三月、掲載予定）

（4）中古音とは、Bernhard Karlgren（高本漢）氏のいう Ancient Chinese の訳語である。次の論考を参照。
Bernhard Karlgren : Etudes sur la phonologie chinoise (Archives d'Etudes orientales Publiées par J.-A. Lundell, Vol. 15, 1926)
Bernhard Karlgren : Compendium of phonetics in Ancient and Archaic Chinese (The Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm, Bulletin No. 26, 1954)

（5）原本切韻（陸方言編、六〇一年成書）から広韻に至るまでの切韻諸本を指す。

（6）「図書寮本類聚名義抄　本文篇・解説索引篇」（勉誠社、昭和五十一年十一月）

（7）三根谷説については、次の諸論考を参照。ただし、侵韻の表記に関しては -iəm → -iem のような変更を考えられている。本稿でも、これに従った。
三根谷徹「中古漢語の韻母の体系――切韻の性格――」（言語研究、第三十一号、昭和三十一年）
三根谷徹「越南漢字音の研究」（東洋文庫、昭和四十七年）
三根谷徹「唐代の標準語音について」（東洋学報、第五十七巻一・二号、昭和五十一年）

（8）切韻残簡は「十韻彙編」（台湾学生書局、一九六三年九月）にまとまって

影印刊行されており便利である。略称はその凡例に従った。

(9) 「王三」あるいは完本である所から「全王」とも略称される。「唐写全本王仁昫刊謬補欠切韻校箋」（龍宇純編著、香港中文大学、一九六八年九月）として影印刊行されている。

(10) 「高山寺古辞書資料　第一」（東大出版会、昭和五十二年三月）所収の影印本による。

(11) （注10）の文献所収の影印本による。

(12) 築島裕・小林芳規「高山寺所蔵一字頂輪王儀軌音義について」（国語学、第七十一輯、昭和四十二年十二月）

(13) 周法高「玄応反切字表　附玄応反切考」（香港、崇基書店、一九六八年十二月）による。

(14) 「天理図書館善本叢書観智院本類聚名義抄」（八木書店、昭和五十一年九月）による。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	畜	与魚反	下コ 2オ1 地儀	以諸切	jiʌ¹	(王一)(王三)(切三)(切三)与魚反
2	旋	似泉反	下モ103オ5 雑物	似宣切	ziuan¹	(王一)似泉反
3	暁	呼鳥反	下ア 24ウ5 天象	馨嶌切	xeu²	(王一)(王三)(切三)(觀)呼鳥反
4	暁	呼鳥反	下サ 45ウ2 人事	馨嶌切	xeu²	(王一)(王三)(切三)(觀)呼鳥反
5	榎	古雅反	下エ 14ウ2 植物	古疋切	ka²	(王一)(王三)(切三)古雅反
6	昻	五崗反	下ア 34ウ2 辞字	五剛切	ŋaŋ¹	(切三)五崗反
7	脚	居灼反	下ア 29オ1 人体	居勺切	kiak	(王二)(王三)(切三)居灼反
8	薨	呼弦反	下コ 5ウ1 人事	呼宏切	xuʌŋ¹	(王一)(王三)(切三)呼弦反
9	蒸	諸膺反	下キ 57オ2 人倫	煮仍切	tśiɐŋ¹	(王二)(王三)(切三)諸膺反
10	鞠	居陸反	下キ 60オ2 辞字	居六切	kiʌuk	(弘)居陸反
11	瘃	竹足反	下シ 71ウ3 人体	陟玉切	ṭiauk	(弘)(応)竹足反
12	嗜	視利反	下コ 9ウ1 辞字	常利切	źiei³	(弘)(応)視利反
13	詭	倶毀反	下セ109ウ1 辞字	過委切	kiue²	(弘)(図)倶毀反
14	髓	先累反	下ス115オ1 人体	息委切	siuei²	(弘)先累反
15	濰	過隹反	下ヒ 96ウ5 辞字	以追切	jiuei¹	(弘)過隹反
16	希	虚依反	下ス117ウ4 辞字	香衣切	xiʌi¹	(弘)虚依反
17	疋	山舉反	下シ 76オ3 辞字	踈舉切	ṣiʌ²	(弘)山舉反
18	懇	与居反	下ア 29ウ6 人事	以諸切	jiʌ¹	(弘)与居反
19	與	与居反	下ユ 67オ3 人事	以諸切	jiʌ¹	(弘)与居反
20	蘇	先胡反	下キ 57オ1 人倫	素姑切	suʌ¹	(弘)(応)先胡反
21	注	丁住反	下シ 76オ2 辞字	(該当なし)		(図)丁住反
22	輸	如珠反	下モ105オ1 辞字	式朱切	śiuʌ¹	(弘)如珠反
23	溢	余質反	下ア 34オ1 員数	夷質切	jiet	(弘)余質反
24	亟	所乙反	下シ 70ウ3 動物	所櫛切	ṣiɐt	(弘)(応)所乙反
25	捫	莫昆反	下モ104オ3 辞字	莫奔切	mʌn¹	(弘)(応)莫昆反
26	難	奴但反	下モ104オ7 辞字	奴案切	nan³	(弘)奴但反
27	齦	牛善反	下ア 29オ5 人体	研峴切	ŋen²	(弘)牛善反
28	紲	思列反	下キ 58ウ3 雑物	私列切	siat	(弘)(図)思列反
29	悛	旦泉反	下サ 49ウ2 辞字	此緣切	tsʻiuan¹	(弘)(図)旦泉反
30	洮	他刀反	下テ 20オ3 人事	土刀切	tʻau¹	(弘)(観)他刀反
31	討	恥老反	下サ 48ウ6 辞字	他浩切	tʻau²	(弘)(図)(観)恥老反
32	醪	力刀反	下モ102ウ7 飲食	魯刀切	lau¹	(弘)(応)力刀反
33	燿	羊昌反	下ス119オ1 辞字	弋照切	jiau³	(観)羊昌
34	耀	徒蓼反	下コ 9オ7 辞字	徒了切	deu²	(弘)徒蓼反
35	嘵	虚條反	下ア 37ウ3 辞字	許幺切	xeu¹	(弘)虚條反
36	檛	竹花反	下キ 58ウ3 雑物	陟瓜切	ṭua¹	(弘)(観)竹華反
37	臛	呼各反	下ア 31オ6 飲食	呵各切	xak	(弘)(観)(応)(唐)呼各反
38	貺	詡誑反	下ア 36オ5 辞字	許訪切	xiuaŋ³	(弘)詡誑反
39	箏	爼耕反	下シ 73ウ6 雑物	側莖切	tṣɐŋ¹	(弘)爼耕反

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
40	搤	於責反	下モ104オ3辞字	於革切	ʼɐk	(弘)(応)於責反
41	偶	吾苟反	下ア 34オ5辞字	五口切	ŋʌu²	(弘)(応)吾苟反
42	荏	而枕反	下エ 14オ7植物	如甚切	ńiem²	(弘)(観)而枕反
43	蟄	除立反	下コ 8ウ1辞字	直立切	ḍiep	(弘)(観)(応)除立反
44	譚	徒耽反	下セ109ウ1辞字	徒含切	dʌm¹	(弘)(図)徒耽反
45	扱	初洽反	下サ 50オ7辞字	楚洽切	ṭsʻɐp	(弘)(観)初洽反
46	貶	碑撿反	下ス117ウ4辞字	方斂切	piam²	(弘)碑撿反
47	鍱	式渉反	下テ 19オ3地儀	與渉切	jiap	(観)(後)式渉反
48	拈	乃兼反	下モ104オ3辞字	奴兼切	nem¹	(応)乃兼反
49	踵	之勇反	下ユ 67オ3人事	之隴切	tśiauŋ²	(弘)(応)之勇反
50	髕	蒲忍反	下ア 29オ4人体	毗忍切	bjien²	(応)蒲忍反
51	嫪	力到反	下ア 37オ4辞字	郎到切	lau³	(応)力到反
52	蘖	補麦反	下キ 56オ5植物	博厄切	pɐk	(応)補麦反
53	蕎	渠用反	下キ 56ウ5動物	渠容切	giauŋ¹	
54	慵	蜀用反	下モ102ウ2人事	蜀容切	ziauŋ¹	
55	躅	馳六反	下ア 34ウ6辞字	直録切	ḍiauk	
56	事	市吏反	下コ 5オ2人事	鉏吏切	dẓiɐi³	
57	娭	几基反	下コ 9ウ1辞字	許其切	xiɐi¹	
58	筋	治據反	下ヒ 94オ7雑物	遲倨切	ḍiʌ³	
59	鋤	床據反	下ス116ウ1雑物	牀呂切	dẓiʌ²	
60	忤	五許反	下サ 49オ2辞字	五故切	ŋuʌ³	
61	悖	甫貝反	下サ 49オ2辞字	蒲昧切	bʌi³	
62	悖	甫貝反	下サ 50オ4辞字	蒲昧切	bʌi³	
63	朘	宍回反	下ヒ 93オ3人体	臧回切	tsuʌi¹	
64	訹	私一反	下コ 9ウ3辞字	辛聿切	siuet	
65	旦	得晏反	下ア 24ウ3天象	得按切	tan³	
66	矇	莫仐反	下ヒ 97オ4辞字	莫賢切	men¹	
67	諺	魚見反	下コ 5ウ2人事	魚變切	ŋian³	
68	眊	莫到反	下シ 77オ2辞字	莫報切	mau³	
69	漕	在唐反	下コ 8オ5辞字	在到切	dzau³	
70	襖	烏老反	下ア 32オ2雑物	烏晧切	ʼau²	(慧)烏老反
71	詔	私妙反	下セ108オ3人事	之沙切	tśiau³	
72	舞	我阿反	下サ 47オ3雑物	古疋切	ka²	
73	椁	之国反	下エ 14オ4地儀	古博切	kuak	
74	蔀	士略反	下キ 59オ7辞字	側略切	tṣiak	
75	榜	補曠反	下コ 8オ6辞字	北孟切	paŋ³	
76	勁	其京反	下コ 9オ3辞字	渠京切	giaŋ¹	
77	迪	大歴反	下ス118ウ4辞字	徒歴切	dek	
78	齏	即介反	下ア 31オ7飲食	該当なし		

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
79	極	渠□反	下キ 60オ1 辞字	渠力切	giɛk	(弘)渠力反・渠憶反
80	鞦	碎迴反	下シ 74オ6 雑物	該当なし		(観)碎間反
81	蜕	姑悅反	下モ101ウ6 動物	該当なし		
82	糅	仄乱反	下モ102ウ7 飲食	該当なし		
83	燿	蘇孝反	下ス119オ1 辞字	該当なし		
(a)	渾	肥満反	下ア 34オ1 員数	扇墓切	γuʌn$^{1\cdot2}$	
(b)	藻	水莱反	下モ101ウ2 植物	子晧切	tsau^{2}	
(c)	材	木梃反	下サ 45オ7 人事	昨哉切	dzʌi^{1}	
(d)	嬗	変化反	下モ101ウ6 動物	時戦切	źian^{3}	
(e)	泐	凝合反	下コ 9ウ4 辞字	林直切	liɛk	
(f)	臞	魚鳥反	下ア 31オ6 飲食	火酷切	xauk	

＜校異＞

2	③	以泉反 → 似泉反	
8	③	呼肱反 → 呼弦反	
10	③	居法反 → 居陸反	
13	③	但毀反 → 俱毀反	
15	③	過進反 → 過隹反	
16	③	虚衣反 → 虚依反	
20	③	光胡反 → 先胡反	
27	③	生善反 → 牛善反	
30	③	他打反 → 他刀反	
36	①	撾 → 檛	
38	③	訓誑反 → 謂誑反	
39	③	炟耕反 → 俎耕反	
40	①	塩 → 盐	
42	③	而秋反 → 而枕反	
44	③	徒尤反 → 徒耽反	
46	③	俾扌反 → 俾撿反	
49	③	止勇反 → 之勇反	
61	③	甫見反 → 甫貝反	
62	③	甫見反 → 甫貝反	
65	③	得安 → 得安反	
80	③	碎迴反 → 碎迴反	

① 番号
② 被注字
③ 前田本所収の反切
④ 前田本における所在
⑤ 広韻所収の反切
⑥ 中古音（三根谷説）
⑦ 引用書所収の反切

（切二）
（切三）
（王一）
（王二）
} 切韻残簡

（王三） 唐写全本王仁昫刊謬補欠切韻
（弘） 篆隷万象名義
（図） 図書寮本類聚名義抄
（観） 観智院本類聚名義抄
（倭） 倭名類聚抄
（応） 玄応撰一切経音義
（慧） 慧琳撰一切経音義